住宅建築賞2023

主催 一般社団法人 東京建築士会

企画 東京建築士会 事業委員会

後援予定 公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 東京都建築士事務所協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
株式会社 新建築社
株式会社 エクスナレッジ

協賛 株式会社 穴吹工務店
株式会社 市浦ハウジング&プランニング
株式会社 ガネット
環境・省エネルギー計算センター
株式会社 建築資料研究社
株式会社 建築画報社
株式会社 総合資格
飛島建設 株式会社
株式会社 ピアレックス・テクノロジーズ

お問合せ先
一般社団法人 東京建築士会
中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階
TEL:03-3527-3100　FAX:03-3527-3101
[E-mail] jks@tokyokenchikushikai.or.jp
https://tokyokenchikushikai.or.jp

一般社団法人
東京建築士会
TOKYO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

RESIDENTIAL ARCHITECTURE PRIZE

住宅建築賞2023入賞作品集

住宅建築賞 入賞者

住宅建築賞 金賞

齋藤 隆太郎 + 井手 駿

住宅建築賞

服部 大祐
古谷 俊一
溝部 礼士 + 坪井 宏嗣
工藤 浩平 + 宮崎 侑也

住宅建築賞 入賞作品

2023年 | 一般社団法人 東京建築士会

応募主旨

審査員長　吉村 靖孝

【東京のローカリティ】

本賞は「新人建築家の登竜門」を謳う賞で、過去の受賞者のその後の活躍を見れば看板に偽りなしと言える。ただ、昔から気がかりだった事がひとつあって、それは、東京周辺以外の住宅作品を審査対象から除外して来た事だ。もちろん、大前提が"東京"建築士会の顕彰活動であるし、現地審査を一日で終えるなどの条件から考えても東京周辺限定は致し方ないのだが、一方で、新人建築家にとって東京に作品があることは単なる偶然でしかないし、仮に東京在住かつ東京建築士会会員であっても東京に作品がなければ応募できないといった矛盾もある。登竜門として全国的知名度を得た今となっては、東京限定の募集はどこかちぐはぐで、東京一極集中に対し無批評かつ無責任にも映るし、ともすれば東京＝全国と吹聴しているかのような誤解を与えかねない。

であるならば逆に、今回はいっそのことこの住宅建築賞を「東京のローカリティ」を考える機会と捉えてみたい。localの語源はラテン語のlocus（〜の場所）で、つまり特定の場所に根ざすことこそが肝心で、必ずしも「地方の〜」を意味しない。世界随一のメガシティであることとローカルであることは矛盾しないのである。また特に近年は、感染症や戦争が各地のローカリティを蹂躙する様を目の当たりにし、私自身もローカリティについて考える機会が増えている。はたして「東京のローカリティ」は可能か。もし可能ならばそれはどのようなものなのか。「場所」としての東京の可能性を押し広げるような作品の応募を期待している。

応募要項

（1）上記の主旨にかなうもの
（2）一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする（大幅な増改築、公共の建築も含む）
（3）原則として作品は下記提出期限日より3年以内に竣工したもの
（4）雑誌等に発表したものでもよい
（5）建築物の所在地は1都3県（東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県）とする
（6）応募の点数は自由とする
（7）審査員の関与した作品は応募できない
（8）応募者は予め建築主（所有者）・施工者の了解を得て応募すること
（9）応募作品の確認申請及び検査済証が必要。応募作品が確認申請不要物件の場合は違法であること

応募要件

賞の対象　設計者・建築主・施工者の3者を顕彰するものとする。

応募資格　応募作品を設計した建築士資格を有し、建築士会正会員である者
登録料 本会正会員：無料（申込時に入会した方を含む）
他道府県 建築士会 正会員：1点につき5,000円（作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください）

提出資料　・本会指定申込書　・本会指定A2 版台紙　・確認申請および検査済証のコピー（確認申請不要物件は、不要理由を明記した文章）
図面及び完成写真数点（内・外観）、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨（300字以内）等をA2版台紙一面（本会指定の用紙・縦づかい、パネル化しない）におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。

提出資料取得方法　申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。
専用申込フォーム（右記QRコード）にてご請求ください。
※土・日・祝日の発送は行っておりません。原則即日発送は致し兼ねますので、お時間に余裕をもって請求ください。

提出先・問合先　一般社団法人東京建築士会　住宅建築賞係
〒103-0006 中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階　TEL 03-3527-3100

提出期限　2023年2月10日（金） 窓口へ直接お持込みの場合は、2月10日（金）17:00 迄とする。郵送の場合は、2月10日の消印有効。

審査員

審査員長　吉村 靖孝

審 査 員　大野 博史／倉方 俊輔／中川 エリカ／西沢 大良

審査

1. 書類審査に通過したものは原則として現地審査する。　※現地審査はマスク着用の上、手指消毒等の感染対策を行い訪問いたします。
2. 入賞発表　2023年4月下旬
   ・審査結果については、応募者に直接通知する
   ・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

表彰及び賞金

1. 入賞者（5点以内）に対し賞状（盾）及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。
   住宅建築賞 70,000円　住宅建築賞金賞 150,000円
2. 建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。
3. 表彰式：本会定時総会の席上（6月上旬開催予定）

応募図面の取扱い

1. 応募A2版台紙の公表及び出版の権利は主催者が保有する。
2. 入賞作品は本会ホームページ及び会報等に掲載する。また、入賞作品展（公開展示：7月開催）の予定がある。
3. 入賞作のうち、東京都内に建築されたものの中から1点を「関東甲信越建築士会ブロック会」の優良建築物表彰作候補作品として、推薦することがある。
4. 応募作品は返却しない。

審査結果（2023年 住宅建築賞）

応募点数 71点　住宅建築賞 入賞5点（内金賞1点）

住宅建築賞 金賞	8.5ハウス（神奈川県）	■設計者：齋藤隆太郎（DOG）＋井手駿 ■建築主：乙部遊＋乙部京子　■施工者：新進建設株式会社（建物構造：木造）
住宅建築賞（受付順）	House in Fukasawa（東京都）	■設計者：服部大祐（Schenk Hattori）　■建築主：白井秀忠 ■施工者：池田工務店（建物構造：木造）
	大森ロッチ新棟 笑門の家（東京都）	■設計者：古谷俊一（古谷デザイン建築設計事務所） ■建築主：矢野一郎・矢野典子　■施工者：株式会社日起（建物構造：木造在来軸組工法）
	石黒邸（東京都）	■設計者：溝部礼士（溝部礼士建築設計事務所）＋坪井宏嗣（株式会社坪井宏嗣構造設計事務所） ■建築主：石黒唯嗣　■施工者：株式会社広橋工務店（建物構造：木造）
	佐竹邸（東京都）	■設計者：工藤浩平＋宮崎侑也（株式会社工藤浩平建築設計事務所） ■建築主：佐竹雄太　■施工者：株式会社住建トレーディング（建物構造：鉄骨造）

参考資料

一次審査結果　2023年2月28日（火）実施。応募作品71点より、1人7点〜10点を投票

【一次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号									
吉 村	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大 野	9	15	35	36	38	50	51	54	61	—
倉 方	3	5	22	25	28	35	50	54	60	61
中 川	3	16	23	37	38	40	50	51	62	71
西 沢	23	24	25	39	54	60	62	—	—	—

一次投票結果　（計23点）

獲得票数	作品番号	合計
3 票	50、54	2作品
2 票	3、23、25、35、38、51、60、61、62	9作品
1 票	5、9、15、16、22、24、28、36、37、39、40、71	12作品

一次投票で選出した23作品より議論のうえ、
二次投票を行った。

下記5点を一次審査通過とし、二次（現地）審査対象とした。
二次（現地）審査は、3月15日（水）に実施した。

25　36　50　54　61

吉村審査員長は、健康上の都合により審査の直接参加が困難となったため、審査員4名による一次審査および二次審査を行い、結果を報告・協議した上で、賞を決定した。

【二次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号				
吉 村	—	—	—	—	—
大 野	36	50	51	54	61
倉 方	25	35	50	54	61
中 川	23	37	50	51	61
西 沢	23	24	25	50	61

二次投票結果（下記10点より、議論）（計10点）

獲得票数	作品番号	合計
4 票	50、61	2作品
2 票	23、25、51、54	4作品
1 票	24、35、36、37	4作品

一次審査風景

作品講評

総評

審査員 西沢 大良

2023年の住宅建築賞は、「東京のローカリティ」という一風変わった募集テーマを掲げたが、総数71点の応募に恵まれた。この募集テーマを噛み砕いて言うと、「東京圏に特有の地域性とは何か」という問いかけである。一次審査では、この問いに建築的な回答を与えた5作品を選出し、二次審査で立地や住み方、設計手法や工法などを確認させていただいた。「佐竹邸」は二つの前面道路（交通量の多い国道と路地のような行止まり道路）のもつ二つの異質な周辺環境にたいして、高さ10mと5mという異なる可能性をもった二つのボリュームで応え、それぞれのスケールをもとに構造形式や開口処理、あるいは発注方法までを考案し、ひとつの美学や図式では対応できない「東京圏特有の地域性」に取り組んだ魅力的な作品だった。また「大森ロッジ新棟 笑門の家」は、同じ設計者による近隣の先行作品群を発展させ、古い木造家屋に二層分のサンルームのような土間空間を付加した改修作品で、ユニークな内外連続性や新旧混在感、また職住接近や和洋折衷感などによって「東京圏特有の地域性」を捉えた意欲的な仕事だった。審査は実りの多いものとなったが、最終的には満場一致で「8.5ハウス」に金賞をさしあげることとした。この住宅が掘り起こした「東京のローカリティ（東京圏特有の地域性）」は想定外のもので、また驚くべきものだったからである。

「8.5ハウス」は、普通の言い方では国道一号線（旧東海道）に面したアトリエ付き小住宅である（神奈川県中郡二宮町、木造2階建て、延87㎡）。この住宅は、写真と図面を見るとフォルマリズム（形態優先）の典型のように映るかもしれないが、実際には周辺エリアにたいして敬意を表する作品だった。東海道に面する北側外観は、勾配屋根のシンプルな立体だが、よく見ると廉価な板金の平葺きで簡素に仕上げられ、過剰な鋭さを避けており、むしろ景観的に前面の東海道の方を引き立てるように工夫されている（ガルバリウムの大屋根の軒先を地面近くまで落とし、この住宅の前面部分の路面だけを日差しで輝かせている）。他方の南側外観は、高さ9m余りの壁面に引き違い窓や勝手口などをおおらかに配して、東海道沿いの古い中層建築群と馴染ませている。現地でこの二つの外観を見た者は、設計者と施主の東海道にたいする敬愛の念を感じ取るはずだが、彼らは少年時代からの古い友人で、ここから十数キロ離れた東海道沿いの街で育っている。

東海道に面したこの敷地を選んだのは施主であり、周辺エリアを「8.5」と呼ぼうと提案したのは設計者である。「8.5」とは、歌川（安藤）広重による浮世絵の連作「東海道五十三次」に描かれた「八次と九次の間」という意味だという。つまり「大磯と小田原の間」のことだが、その広大なエリアにひとつの名前が必要であることを、画家である施主はただちに理解して、1階のギャラリー兼アトリエを「8.5」と名づけて暮らすことになる。その後、施主は地域の人々の求めに応じるかたちで、「area 8.5」と描くストリート系のペイントを次々と制作することになっていく。

例えば近所に住む高齢の女性が「自宅のシャッターを塗り替えたいが、あなたにarea 8.5と大きく描いてほしい」と施主に依頼してきた。必ずしも美術の知識を持たないその女性は、「area 8.5」というフレーズに感激し、シャッター壁画を注文したのである。あるいは江ノ電の職員たちが「藤沢駅の看板にarea 8.5という文字の入った大きな壁画を描いてほしい」と施主に依頼した。彼らも「area 8.5」というアイデアに感銘を受け、壁画を発注したのである。こうして大小さまざまな「area 8.5」のペインティングが、このエリアにおいては家屋や塀や駅舎にカラフルに描かれ続け、静かな壁画運動のように拡大しているのである。

なぜこのエリアに住む人々は、「area 8.5」という呼称にそれほど強く反応するのか。おそらく彼らは、自分の生まれた街が「東海道五十三次」において存在を消されたこと、描くに値しない場所とされたことに、長らく納得のいかない思いを抱いてきたのである。もともと19世紀前半の浮世絵（名所絵）は、東海道であれ富嶽であれ、良くも悪くも「点」として切り取ってしまうからである。つまり一方に小田原という「見事な点」があり、他方に大磯という「忘れ難き点」がある、といった連作の妙によって人気を博し、江戸時代において観光ブームを巻き起こしたのである。ただし、その副産物として、それらの「点」に近づけば近づくほど「本物」があり、遠ざかるほど無価値であるかのような、錯覚ないし偏見が生じた。この偏見は、20世紀に入ると観光写真や旅行番組によって不用意に繰り返され、また東海道新幹線の駅の立地選定などにおいて無自覚に繰り返され、このエリアの人々に歯がゆい思いをさせてきたのである。だからこそ「area 8.5」というスローガンは、この200年近い偏見を覆すものとして、このエリアの人々にまたたく間に支持されて、一種の壁画運動に結実したのである。彼らにとって「area 8.5」とは、八次や九次といった「点」のことではなく、その背後に存在している広大な「面」のことであり、その「面」のなかで生きてきた自分たちのことなのである。

「8.5ハウス」のもたらしたアノニマスな壁画運動は、今日の東京圏では稀有な「草の根の運動」であり、一軒の住宅から始まった「市民運動」である。かくも多くの市井の人々が、この住宅の登場によって目を覚まし、行動に駆り立てられていったという事実に、筆者は驚嘆の念を覚えずにはいられない。ここにひとりの画家が住んで壁画を制作するうちに、膨大な人々が尊厳を取り戻し、街への敬愛の念を回復したことに、感嘆の声をあげずにいられない。この住宅が紡いでいるそうしたストーリー全体が、「東京のローカリティ（東京圏特有の地域性）」という問いにたいする見事な回答であることを、賞賛せずにいられない。

一次審査風景

作品講評

2023年 住宅建築賞 作品講評

住宅建築賞 金賞 | 8.5 ハウス | 設計者 齋藤隆太郎（DOG）＋井手駿 | 講評者 中川 エリカ

家を地域にひらこうとするとき、その多くは、あらかじめ、施主が意欲的に家びらきを捉え、建築に求めるプログラムのひとつとして、既に「ひらく」という状況が含まれているケースがほとんどではないだろうか。施主の意欲に建築家が応えた結果としての家びらきは、時に、空間そのもののパワーよりも、施主のキャラクターやSNSによる発信力、運営力がプロジェクトをおもしろくしていることがある。それは、とても意義があることだけど、でも、建築というモノづくりを仕事にしている私たちは、目の前にあるモノが、人々の言葉にならない思いを代弁したり、まだ知らない未来を予言するパワーを持っていると知っているからこそ、どこか少し物足りなさを感じてしまうのも事実ではないだろうか。

金賞に輝いた8.5ハウスは、竣工から数年経った今、家が特殊なパワーをもつかたちだったからこそ、施主の所有物ということを超えて、街／エリアのシンボルになっている事例である。作品名にある「8.5」とは、東海道五十三次の8（大磯宿）と9（小田原宿）のあいだに敷地が位置していたことから、元は、建築家が名付けたのだという。この命名が、五十三次の8にも9にも入れなかった膨大なエリア、膨大な人々を、ひとつの家が代表するという発展への後押しとなり、施主の仕事であるグラフィティが地域に広がるきっかけとなった。時間をかけたこの実証を、現地審査における多くの資料から思い知らされ、審査員一同、驚嘆するとともに、これは、施主発信のプログラム的な家びらきというよりもむしろ、家が、建築家の仕事によってエリアのシンボルとなるパワーを持っていたからこそ引き起こされた状況であり、建築・空間発信の家びらきだということを確認した。

特異な建ち現れ方をした外観は、なるべく国道一号に影を落とすべきではない、という判断のもと、日射のシミュレーションを入念に繰り返した結果だったとのこと。現地審査の前は、この外観によって内部空間が犠牲になっていないだろうかと心配したが、実際は、視線を、自らのかたちで明るくしている国道一号へ自然と誘導することによる開放感があり、コンパクトでありながらも、一日中くつろげそうな快適さがあった。建築家は当初から、建築をつくることによって、敷地を超えた周辺を含めた環境を良くしていこうという意識を持っていたのだと理解した。この意識が、「8.5ハウス」という命名につながったのだとして、8.5という膨大なエリアをいわば「東京のローカリティ」のひとつだと捉えるなら、エリアを代表するシンボルとなり、今では活動を牽引しているともいえる8.5ハウスはまさに、今回の賞のテーマに実にストレートに応答している。

住宅建築賞 | House in Fukasawa | 設計者 | 服部大祐(Schenk Hattori) | 講評者 | 大野 博史

配置図を見るとそのあたり一帯が同じ敷地形状をしていることがわかる。間口が狭く奥に長いいわゆる「鰻の寝床」のような形状である。公園に面したこの住宅は一階の階高を高くしつつ、二階床にレベル差を設けている。隣家や通りと目線の合わないところに開口を設け、敷地手前と奥の部屋をつなぐ広い廊下のような空間をユーティリティとして集約することで、暗さや狭さを感じさせない工夫がされている。2階は室ごとにレベルがあがっていく。ここでも高窓が有効に機能し、一階とは対比的に極めて明るいトンネル状空間になっている。木造の場合、床の水平剛性が低いため長い空間を分断するように耐力壁が必要になるが、ここでは、一階の耐力壁と連続する三角トラスが二階床と屋根を支えるように一定間隔で配置されている。層間をまたぐトラスは複雑な接合になりがちだが、挟み梁とすることで簡易な接合を実現し、階高が異なる二層を支えるために、トラスの位置、幾何学は絶妙に調整され見事なまでに建築と構造の一体性をみることができる。この作品には華美な構造表現にはない、建築における構造の奥深さが現れている。

住宅建築賞 | 大森ロッヂ新棟 笑門の家 | 設計者 | 古谷俊一(古谷デザイン建築設計事務所) | 講評者 | 倉方 俊輔

「大森ロッヂ」という、すでに評価を得たプロジェクトとの関係が、現地審査のポイントだった。どこにでもあるような、ゆとりのある風景が、大開発だったり、ミニ開発だったり、いずれにしても狙いすました建て替えで消え失せてしまう東京にあって、8棟の木造住宅の風景を、路地を介した穏やかな共同体に再生させた「大森ロッヂ」の大家の見事さに寄りかかっていやしないか、あるいは既存のそれらとは少し距離が離れていて無関係に終わってはいないか、そんな懸念を抱いていたのだが、現実の「笑門の家」はリノベーションという手法の可能性についても、単に切り離すのではない内部と外部の関係の作り方においても、働くことと暮らすことが交わる空間づくりに関しても、既存の「大森ロッヂ」のありようを受け継ぎながら、設計者の個性を介して、新たな展開に踏み出したものだった。借り手が決まっていない段階で改修設計したからこその伸びやかさがある。それを借りてくれる人がいる。東京という街にはゆとりがあるという健やかな気持ちにさせてくれる。

住宅建築賞 | 石黒邸 | 設計者 | 溝部礼士(溝部礼士建築設計事務所)＋坪井宏嗣(株式会社坪井宏嗣構造設計事務所) | 講評者 | 西沢 大良

恵まれた環境に立つ木造3階建ての二世帯住宅。一般に国内の木造住宅が基準にしている900mmモデュールは、実は細かいところで問題を起こしやすいという難点をもつ(台所全体のD寸、廊下の有効W寸、玄関や出入口W寸、収納D寸など)。だが「石黒邸」は独自の750mmモデュールで設計されているため、エントランスの屋外階段やテラスはたっぷりとしたW寸をもち(どちらもW1500)、台所の機器周りや動作空間もストレスがなく(D2250)、どの収納も奥行き寸法が適切で(D750)、UB回りも配管ルートを含めてキレイに解決されている(D1500)。しかも750mmモデュールによって達成された床の剛性の高さは、各階の天井高の設定とも相まって、この3階建ての住宅に木造でもRC造でもない感触を与えており、体感としては北欧の低層集合住宅(タウンハウス)のなかのような印象である。こうした特徴がすべて750mmモデュールの効果であることは、各階上空に現われた750mmピッチの木製梁によって種明かしのように示されている。非常に良質な住宅建築である。

住宅建築賞 | 佐竹邸 | 設計者 | 工藤浩平＋宮崎侑也(株式会社工藤浩平建築設計事務所) | 講評者 | 倉方 俊輔

現地を訪れて、土地に対して好ましい建ち方だという感銘をまず受けた。高層部は前面道路に迫り出し、ピン角ですくっと立つ形で幅員の割に車の往来の多い通りを受け止め、横の路地には曲面で向き合いながら背の低い開口が開いていて、この土地の唯一性を建築が強めている。その背景に、壁面の色彩や断面の取り合いといった入念な検討があることは明らかである。冒頭で述べた感銘とは、住宅を建てることを通して、平野の彼方まで細分化されながら無数に存在し、一つ一つが人生を賭けるほどに高価な東京の土地の一つ一つを愛で、育てているという事実から受けとったものなのだろう。このような土地の唯一性に対応した設計が、不動産業を営む施主から将来的な転売可能性も視野に入れて望まれ、施工プロセスにも詳しい設計者が工事費の多寡も意匠性に組み込みながら実現されたという事実は、東京における普遍解ではない住宅の普遍性を垣間見させる。

8.5ハウス

東海道からアートを発信するアトリエ付き住宅

「住む」「展示する」「製作する」「街に開く」ことを統合する。このプロジェクトは、歌川広重が歩き描いた東海道沿いに建つ、狭小アトリエ付き住宅の計画である。施主が自身の作品や観る人々な展示壁を、敷地対角線に最大長確保して街に発信するという考えから設計が始まり、大磯（8番目の宿場）と小田原（9番目の宿場）の間に位置する二宮町に、東海道五十三次の雰囲気を紡いでもらうこととした。敷地北側の東海道に日が差すように壁を兼ねた傾斜屋根と平面対角線の展示壁を掛け合わせることで、立体図形的に「広い・狭い」「高い・低い」の要素が入り交じれされた空間が生まれ、身体性を揺さぶる、画家にとって想起となる住宅である。

東海道からギャラリーを望む

太平洋に程近いロケーション

彫塑的トルソの外観

「エリア8.5」について

1つの家の出現が、本当に町を変えた

設計当初においては、予算や建坪の関係で二宮町にアートを発信するという考え方には慎重であった。設計が進むに連れ、アトリエが東海道に表出し、大きな面積が確保できたことで、「アートで特徴のない二宮を変えられないか」という発想に切り替わった。この8.5ハウスが立ち上がったことで、施主はアトリエをギャラリー兼ショップとして町に開き、そこを核として近隣の住民たちと二宮町を巻き込んで「エリア8.5」計画を発起し、まちのアート再生計画が始まった。8.5ハウスを起点として、施主が二宮町の様々な壁に壁画アートを施したり、様々にアートの和が広がりを見せながら、二宮町が活気ある町に変わった。

エリア8.5 範囲図 S=1/20,000

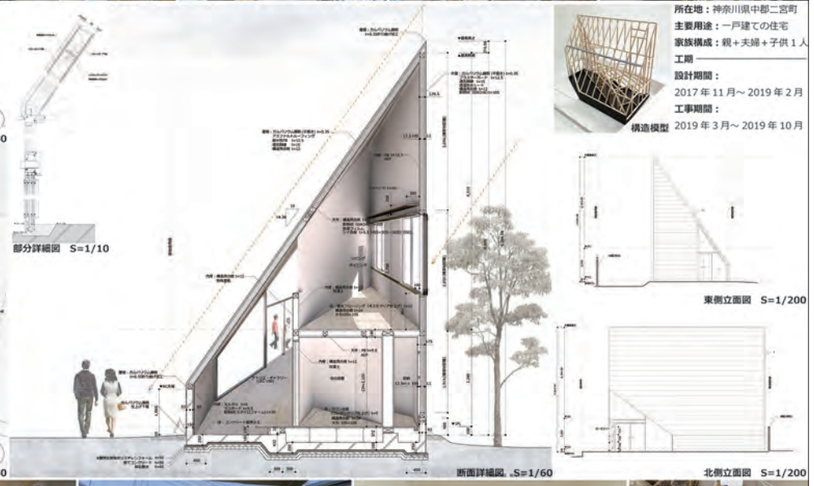
展示壁により分けられる住エリアとアトリエ

A. 広く高い空間

C. 狭く高い空間

2F平面図 S=1/150

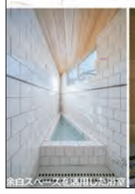
配置図兼1F平面図 S=1/150


部分詳細図 S=1/10
断面詳細図 S=1/60

所在地：神奈川県中郡二宮町
主要用途：一戸建ての住宅
家族構成：親＋夫婦＋子供１人
工期
設計期間：
2017年11月～2019年2月
工事期間：
2019年3月～2019年10月

構造模型

東側立面図 S=1/200
北側立面図 S=1/200


白とスケルトンが引き立つ

アトリエより吾妻山を望む

大小様々な絵を飾ることのできる大きな展示壁

特別の展示室にちなむ背景

8.5グッズを販売するショップ

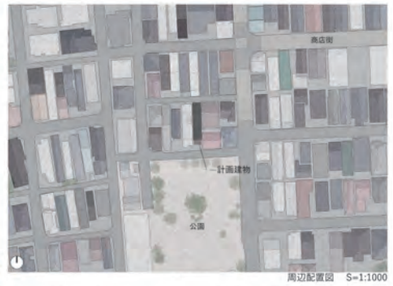
House in Fukasawa

固有性と普遍性の狭間を往来する建築の構成

起伏豊かな深沢の街。敷地一帯は都心ながらも開発から取り残されたような昔ながらの商店街が広がり、間口が狭く奥行のある敷地に小さな短冊状の建物が建ち並ぶ。
都市部でよく遭遇するこのような敷地に、最も単純な木造のボリュームを考えると、必然、細長いトンネル状の空間が生まれる。すると往々にして、外部との関係性が限定され、敷地条件がそのまま制約として現れたような内部空間となってしまう。
ここでは、一般解として単純な木造を前提としながら、この敷地の環境を活かした固有の空間体験を生み出すと同時に、同類の敷地において普遍的な型ともなり得るような建築の構成を見つけたいと考えた。

外観　南面ファサード

エントランスアプローチ



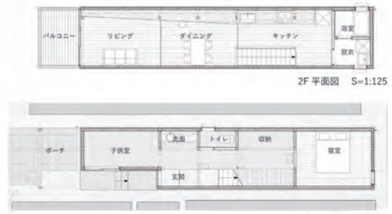
周辺配置図 S=1:1000

所在地：東京都世田谷区
用途：専用住宅（夫婦＋子１人）
構造：木造・地上２階建

敷地面積：65.01㎡
建築面積：38.19㎡（建蔽率 58.75%）
延床面積：71.53㎡（容積率 110.03%）

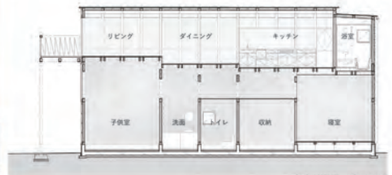
ダイニングからリビングを見通す

街の起伏を思わせる段差をもつ上階。等間隔の柱と不等間隔のトラス材の組み合わせ、空へと繋がる東西面の高窓による、軽快なリズムをもった光溢れる一室空間



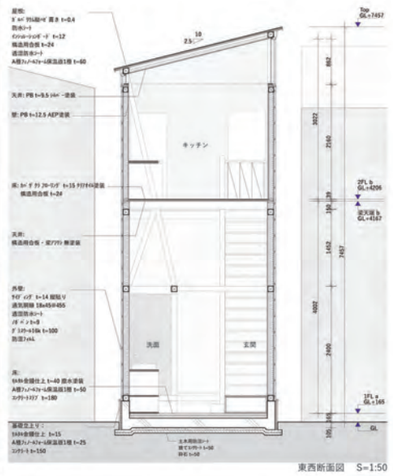
2F平面図 S=1:125

1F平面図 S=1:125



南北断面図 S=1:125

分割し兼ねないほど対照的な上下の空間が、互いを貫く一つの架構形式によって繋ぎとめられる



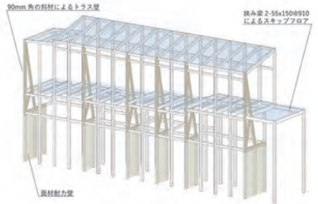
東西断面図 S=1:50

玄関

廊下

子供室

エントランスから一段沈み込んだ下階は、最大階高4.4m。トラス部材下方の耐力壁と限定された開口部による、光と暗がりの濃淡を持った場が連続する



構造ダイアグラム

開口2.73m、奥行13.65mのボリューム外周に、在来軸組工法の手順に倣い規則的に柱を落とし、6枚のトラス形状の壁によって開口方向の水平抵抗要素を確保する。そこに柱や斜材を挟み込むように梁を掛けていくことで、多様な気積をもった上下二層の躯体が建ち上がる

南側外観。もともと下屋とバルコニーがあった南面にヴォリュームを再設定

庭との接続スペースにもなるインナーガーデン

家具收蔵。床の一部を残し、南側を土間として切り下げた

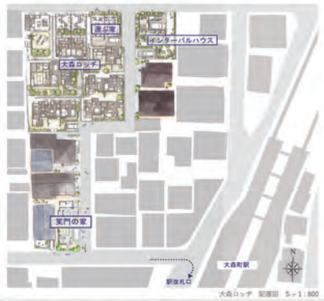
2階から見たインナーガーデンを見る

大森ロッヂ新棟　笑門の家

この住宅は、2011 年に竣工した「大森ロッヂ」のエントランスをかたちづくる住宅である。大田区大森西にある「大森ロッヂ」は、昭和の趣きを残す木造長屋に光を当て、2009 年より順次現代の生活に寄り添い改修。高気密高断熱主義とは距離を置いた価値を発信し、自立共愉を目指して、入居者イベントなどを通して暮らしそのものを問い続けている。そして 2015 年に店舗付き長屋「運ぶ家」がその側に完成する。買うか借りるかという二元論を超え、住まい手が単なる賃借人に収まらず、オーナー、設計者と共に賃貸事業にコミットし、住まいの質を向上し合い続ける関係を構築している。その象徴である燃え代設計の木造住に支えられた空中のヴォイド空間は、街と空間をシェアするように存在している。2019 年には設計者の自邸である「インターバルハウス」が完成。「運ぶ家」の双子のような建築であるが、大森ロッヂを含む街の庭のような建築をつくりたいと考え、年々緑に凌駕される装置が街の庭としてシェアされる存在への成長を感じる。

この「笑門の家」では、街角にインナーガーデンを設け、住まい手の営みがそのまま街角を形成する。既存の下屋およびバルコニーを含めた空間を解体し、風景をつくっていた接熱（構造）は残しつつ、温室フレームで包み込むことで街と住まいの間の緩衝帯（庭）を設け、人の気配や温熱環境を住まい手自らが調整する。パブリックの入り口舎、自己と他者がシェアする深度をも自ら調整するのである。そうしてそのミセ空間では住まい手がその住まい方をプレゼンテーションする場として活用することができる。店や教室、作業場やオフィススペースなど、ポケットパークのような街角の一面がプライベートともパブリックともつかない性質を帯びて、その中庭なスタンスがそのまま顔になり、街の中で共有される。

たとえばの話。近所の人がこの家に目を止める。屋は開いており店のようで、中を覗くと植物屋さんだと分かる。そこで住まい手との会話が生まれ、この住み方に対する考えを聞くかもしれない。そうして買って帰った植物を人通りのある自身の家の庭先に植え込み、街行く人たちにその花を楽しんでもらおうと考える。そんなふうに個々人が楽しく暮らす様が街の活力に繋がる家を目指している。



大森ロッヂ　配置図　S＝1：800

改修前の外観。ブロック塀で閉ざされていた

工事中。下屋の屋根が取り払われ、空が入り込む

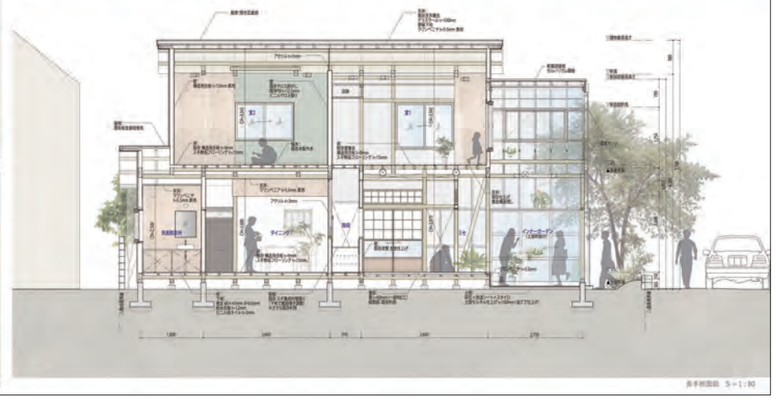
改修前の内部。畳のつづき間と内縁の構成

インターバルハウスで開催した植木市の様子

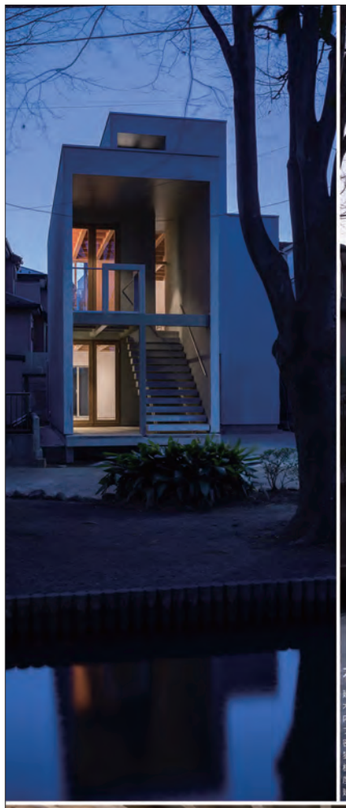
インターバルハウスと運ぶ家のみどりが街にひろがる

2階平面図　S＝1：100

1階平面図　S＝1：100

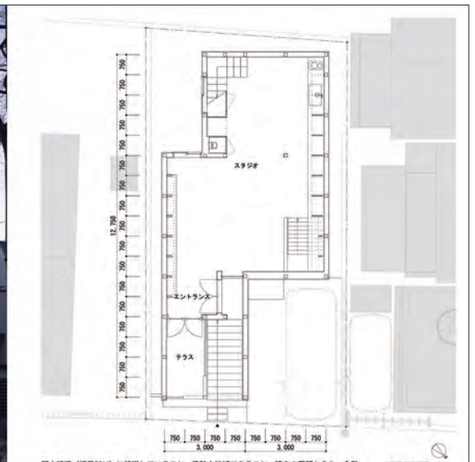


長手断面図　S＝1：80



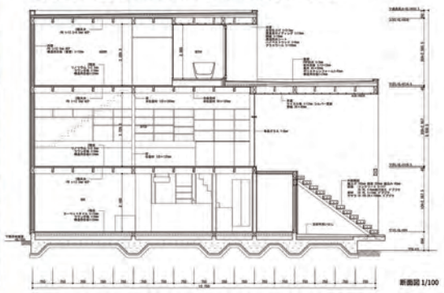
石黒邸

建築、写真、音楽を趣味とする建主が母と二人で住まう住宅。旧江戸川沿いに建つ。木造モテュールを910mmではなく、750mmモテュールを採用した。
内法750mmに納まらない階段は横長に伸び、狭い扉は両開きとなって拡がり、部位のプロポーションが狂う。室は750mmグリッドの天井躯体により圧縮がかかったような密実な空間となる。このともすれば強引な操作が、建築の強さとして妥興することを狙った。
機能や目的から逸脱し、意味を失って、部位がモノとして生き始める。それらが、調度品の放つ照りや質感、陽光に煌めく木々や水面のさざ波などと等しく出会うとき、建築が日常の一部分として強く実感され愛情に満ちた関係が現れることを望んだ。



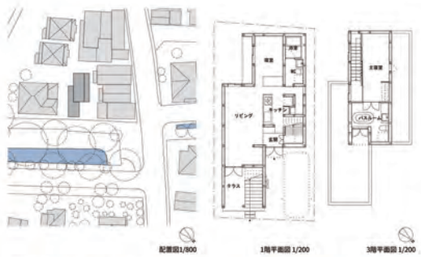
2階配置平面図 1/100

親水緑道（幅員22M）に接道していること、準防火地域であること、建主の要望からも、令和元年国交告示194号第4の開口部制限を用いて、木造3階建てでも躯体現しとできる建ち方を選んだ。（幅員が大きいため正面は開口部制限がかからない。）また、深いヴォイド状のテラス空間を街並みに向けることで、開口部は非防火となり、木製開き戸を設置し京観に配慮した。

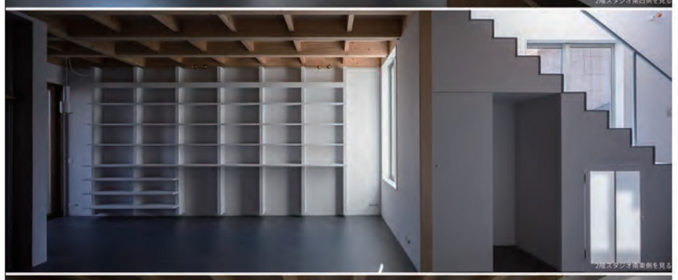


断面図 1/100

2階スタジオ南西側を見る



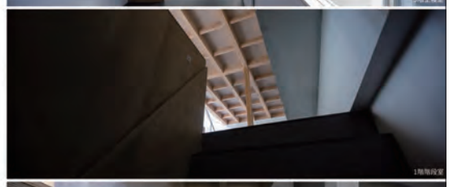
配置図1/800　1階平面図 1/200　3階平面図 1/200



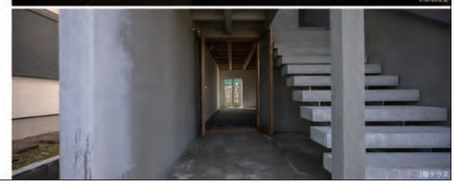
2階スタジオ南東側を見る

3階主寝室

2階スタジオ北側（緑道）を見る



1階階段室

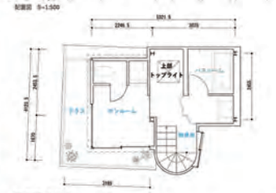


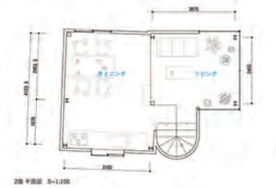
1階テラス

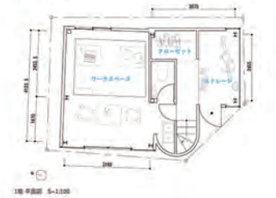
佐竹邸

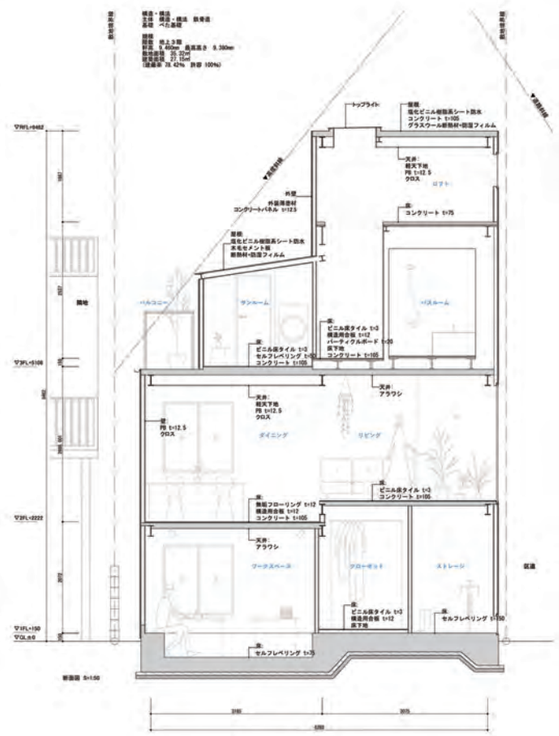
小さな敷地から大きくまちを拾い集めること

都内で暮らす夫婦のための、ワークスペースをもった住宅である。将来的に売ることができる住宅にしたいという建主の要望から、純ラーメン造を選択し、暮らしを囲うことに加えて、住宅とは異なる機能に引き継ぐ可能性も考慮した。狭小地のため合理的にプランを積み重ねていく一方で、敷地は三方に開いた立面をつくれるため、開口部を通してまちと生活を強く結び付けた。地階では、玄関足元にまちの気配のみ通す下窓を設け、ワークスペースは路地側を全面開口にすることでオフィスとして構えた。2階リビングは前面道路にせり出し3面をガラス張りにし、住まい手によって用途を変える舞台のようなかたちとした。3階に水回りとサンルームをまとめ、空地に対して大きく開くことでまちへの広がりを感じ、ロフトはトップライトからたくさんの光を受ける。
狭小地だからこそ開口部が際立ち、人の移動を伴ってめくるめくように情景が移り変わっていく。
そういった生活の一部を外に放り投げるようなダイナミックさは、まちから見ても魅力的で価値の残るものになると思った。









住宅建築賞受賞者プロフィール

8.5ハウス

齋藤 隆太郎
SAITO Ryutaro

1984年：東京都生まれ
2006年：東京理科大学工学部建築学科卒業
2008年：東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
2008～2014年：株式会社竹中工務店設計部
2014年～：DOG一級建築士事務所
2021年：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士後期課程修了 博士（工学）
2022年～：東北工業大学講師
2022年～：東京大学大学院客員研究員

井手 駿
IDE Shun

1983年：神奈川県生まれ
2006年：東京理科大学工学部建築学科卒業
2008年：東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
2008～2023年：株式会社日建ハウジングシステム
2023年～：Woven by Toyota

House in Fukasawa

服部 大祐
HATTORI Daisuke

1985年：横浜生まれ
2008年：慶應義塾大学環境情報学部卒業
2012年：メンドリジオ建築アカデミー修士課程修了
2014年：Schenk Hattori設立

大森ロッチ新棟 笑門の家

古谷 俊一
FURUYA Shunichi

1974年：東京都生まれ
1997年：明治大学理工学部建築学科卒業
2000年：早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了（石山修武研究室）
2000～2009年：IDÉE、UDS勤務
2009年：古谷デザイン建築設計事務所設立
2020年～：京都芸術大学客員教授、共立女子大学非常勤講師
2022年：みどりの空間工作所を設立

石黒邸

ⓒfujimorimegumi

溝部 礼士
MIZOBE Reiji

1985年：東京都生まれ
2007年：早稲田大学芸術学校建築設計科卒業
2007～2010年：ゴウ総合計画株式会社
2011～2012年：株式会社SUEP.
2012年：溝部礼士建築設計事務所設立

坪井 宏嗣
TSUBOI Hirotsugu

1976年：山形県生まれ
2001年：東京大学工学部建築学科卒業
2003年：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
2003年：佐藤淳構造設計事務所勤務
2006年：坪井宏嗣構造設計事務所設立
2016年：株式会社坪井宏嗣構造設計事務所設立

佐竹邸

工藤 浩平
KUDO Kohei

1984年：秋田県生まれ
2005年：国立秋田工業高等専門学校環境都市工学科卒業
2008年：東京電機大学工学部建築学科卒業
2011年：東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了
2012～2017年：SANAA（妹島和世+西沢立衛）勤務
2017年：工藤浩平建築設計事務所設立
東京電機大学、学東京理科大学、多摩美術大学 非常勤講師

宮崎 侑也
MIYAZAKI Yuya

1989年：東京都生まれ
2012年：芝浦工業大学建築工学科卒業
2014年：東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了
2015～2018年：SANAA（妹島和世+西沢立衛）勤務
2018～2021年：NAD（NIKKEN ACTIVITY DESIGN lab）勤務
2021年～：工藤浩平建築設計事務所 入所

バスルームを
自由にデザインする

Tokyo Bath Style

オーダーデザインユニットバスのTokyo Bath Style。
厳選したTokyo Bath Style仕様の特注ユニットバスから、
お客さまのイメージに合わせたオーダーユニットバスまで幅広くご提供いたします。

1. 家屋の揺れにも対応する防水性能はそのままに、在来工法並みの自由度を実現
2. バスタブや水栓、タイルなどを色々なメーカーから組み合わせて、自由なレイアウトが可能
3. 柱欠、梁欠、変形形状、トップライト、斜め天井などにも対応。リフォームに最適です
4. シャワーブース併設型のバスルームなど、お客様のご要望に応じてお造りしています

Tokyo Bath Style 株式会社 東京バススタイル

TEL:03(3446)2492　FAX:03(3446)2493　e-mail:info@t-bath.net
〒108-0071　東京都港区白金台5-3-7 くりはらビル2階　［営業時間］10:30～18:00　［定休日］日・祝祭日
※カタログ資料のご請求は、「弊社HPの〈問合せ&資料請求〉」「FAX」「電話」にてお願いいたします

www.t-bath.net

受講生ファーストの
日建学院

日建のここがすごい POINT3

POINT 01
1993年～2022年の1級建築士合格実績
この30年間に誕生した1級建築士の半数以上が日建学院の受講生です!
1級建築士 合格実績 No.1
日建学院 1993年～2022年の合格実績
1級建築士 76,529人
この30年間に誕生した1級建築士の半数以上が日建学院の受講生です!

POINT 02
おかげさまで10冠達成!
建築士講座 No.1
総合満足度 顧客満足度 No.1

POINT 03
私も日建学院で1級建築士を取得しました!
代表取締役 馬場 栄一
だからこそできる受講生ファースト!
コンプライアンスを重視し、徹底的にサポート!

あなたの夢、応援します。
日建学院
★★★ お問い合わせは最寄校へお気軽にどうぞ! ★★★
新宿校 TEL.03-6894-5800
池袋校 TEL.03-3971-1101
上野校 TEL.03-5818-0731
北千住校 TEL.03-6850-0120
新橋校 TEL.03-6858-4650
吉祥寺校 TEL.0422-28-5001
立川校 TEL.042-527-3291

すべてをつくる × 暮らしをつくる
ANABUKI 穴吹工務店

ハウジング分野の専門家集団として
人間居住の向上に貢献する
ICHIURA
HOUSING & PLANNING
株式会社市浦ハウジング&プランニング
本社　113-0033
東京都文京区本郷１丁目 28-34
tel.03-5800-0901

GANNET.inc
建設業界に特化した新卒採用コンサルティング&アウトソーシング
【事業内容】
・新卒採用サービス
・介護研修サービス
株式会社ガネット
東京本社：東京都渋谷区神泉町8-16 渋谷ファーストプレイス1F
TEL：03-5457-5825

省エネ革命で地球を幸せに
環境・省エネルギー計算センター
Center for Environment and Energy Conservation
運営会社：株式会社 HorizonXX（ホライズン）
本社 | 〒171-0022 東京都豊島区南池袋３丁目 15-11　TEL：03-5944-8575
面倒で複雑な省エネ計算はすべてお任せください！
省エネ計算　住宅性能評価　CASBEE
BELS / ZEB / ZEH　東京都環境計画　フラット35
長期優良住宅　避難安全検証法　補助金申請サポート

株式会社
建築画報社
東京都新宿区新宿２-14-6
TEL 03-3356-2568㈹
FAX 03-3356-1966
info@kenchiku-gahou.com
www.kenchiku-gahou.com

スマートな未来へ　New Business Contractor
飛島建設

“見えない”が見えてくる。
打ち放しコンクリート
ピアレックスRC工法
N-RCシステム
フッ素樹脂光触媒クリアー仕上げ
G-PFシステム®
打ち放しコンクリート調描画工法 光触媒コート仕上げ
www.pialex.co.jp
ピアレックスRC工法
光触媒フッ素樹脂コーティング材「ピュアコート®」開発・製造・施工・販売
株式会社ピアレックス・テクノロジーズ

オンリーワン
他の追随を許さない唯一無二の
「講習システム」と「合格実績」
令和4年度
1級建築士 学科・設計製図試験
全国ストレート合格者占有率 No.1 57.9%
全国ストレート合格者1,468名中／当学院当年度受講生850名
令和4年度
1級建築士 設計製図試験
全国合格者占有率 No.1 52.4%
全国合格者 3,473名中／当学院当年度受講生 1,819名
※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。　※全国合格者数・全国ストレート合格者数は、(公財)建築技術教育普及センター発表に基づきます。　※学科・製図ストレート合格者とは、令和4年度1級建築士学科試験に合格し、令和4年度1級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。
総合資格学院
スクールサイト www.shikaku.co.jp
コーポレートサイト www.sogoshikaku.co.jp
Twitter ⇒「@shikaku_sogo」
LINE ⇒「総合資格学院」 総合資格 検索